

の葉（広葉樹とシダなど）と単子葉草本（ススキなど）の茎の繊維である。③、④、⑤には、これ以外のめばしいものはなかったが、①ではバリバリノキ（ $N=10$ ）、フカノキ（ $N=5$ ）、そのほか2～3種の果実食の証拠を認めた。また、②のごく一部から、*Ficus sp.*の種子を検出した。

冬～早春に、果実食がヤクザルにとってどの程度重要であるか、再検討する必要がある。これをふまえて、厳しい季節に入手可能な食物のあり方が、彼らの垂直分布パターンにどのように影響しているかを考察しなければならない。

丸橋は、西部海岸域の隣接して分布する4群の遊動域で、群間関係や群れの個体数と遊動域の面積関係の経年変化を調べた。4群の遊動域は、分裂終了以来4年目の1982年においても変動が続いている。この要因として、個体数の変動、群れ間の優劣関係の変化、森林の土地価の変化、群れの土地利用技術の変化などを指摘できる。1979年には1頭当たり1.84 haの土地を利用していたが、1982年には1.16 haであった。生息密度（頭/km²）の変化としてみると、1979年の54から1982年の83と54%増加した。4群の個体数の増加にもかかわらず、遊動域は全体としてあまり拡大しなかった。オトナオスの移出に対応して、群れ間の優劣関係が変化し、遊動域にあらわれた群間関係も変わった。これらの変化が、群れの採食生態を通じた森の使い方のいかなる変化によっているのかを追求するのは、今後の課題のひとつである。

ヤクザル自然群における個体間関係と群れの統合機構

古市剛史（京大・理）
三谷雅純（ ）

目的

音声スペクトル分析の応用により、従来データ化の難しかった音声コミュニケーション・ネットワークの分析を行い、個体間の空間配置や交渉等の可視的情報と合せて、ヤクニホンザル自然個体群の個体間関係の様子を明らかにする。

期間

1982年4月15日～5月31日（三谷）

1982年7月12日～8月11日（古市）

方法

三谷は、屋久島国割岳西斜面の、通称M群の全

成熟個体12頭について、音声を中心に各10時間ずつの追跡調査を行うと共に、テープレコーダーによって‘coo’ sound coordination を録音し、音声スペクトル分析の技術を用いて音声による個体同定を行なった。古市は、M群及びその周辺各群の群れ内雄間の社会交渉を観察した。

結果

1) 音声による個体識別は、1.基底振動数 2.発声時間 3.スペクトル分析のパターン（いわゆる声紋）の3つを指標とすることで可能である。

2) ‘coo’ sound coordination は、各家系の老母ザルが家系集団を越えた交渉の中心となっていく。この家系集団を越えた結びつきは、従来知られていなかった現象である。

3) 雄間のグルーミング等の親和的社会交渉はサイズや構成の異なる群れでも同様にみられる。

4) M群その他の群れ周辺に、しばしば雄ばかりのサブ・グループが見られる。これには、若雄ばかりでなくアルファ・メールの含まれることもあり、構成は多少とも流動的である。

課題 4 （本年度は延期）

課題 5 （本年度は延期）

課題 6

霊長類の歯に関する性的二型の分化機構について

山田博之（愛院大・歯）

川本淳子（ ）

歯の大きさにおける性的二型を数種霊長類で比較検討した。今回使用した資料は京都大学霊長類研究所所有のオナガザル亜科2種（ニホンザル、アカゲザル）の晒骨された頭蓋骨である。計測は1/20 mm副尺付ノギスを使用し、上下顎第1切歯から第3大臼歯までの歯冠近遠心径・頬舌径を計測した。結果を要約すると以下ようになる。

ニホンザル、アカゲザルではいずれもオスがメスよりも大きな歯をしていた。統計的に比較してみると、ニホンザルでは危険率1%以下の有意な性差がみられたのは32項目中12項目、5%以下で有意差がみられたのは5項目であった。また、